
真剣で幻が通る道

双六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で幻が通る道

【Nコード】

N0019Z

【作者名】

双六

【あらすじ】

川神院に一人の男がやってきた。

その男、17歳ぐらいで、全身真っ黒の格好だった。

ただ一つ、その男の瞳だけは、アメシストの宝石のように、紫色だった……。

超人見知りの男が歩く、摩訶不思議の通り道。

0章 設定（前書き）

まずは、設定です。

作者は小説というものを書いたことがありません。
更新日も未定で、

オリ主がチートのよくある小説だと思います。
よろしく願います。

0章 設定

設定

・ 黒峰 紫貴 （くろみね しき）

男

17歳

家族

黒峰 師禅 （くろみね しぜん）

親に捨てられ、5歳の頃師禅に引き取られる

最初の格好

黒髪

髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ

黒い羽織に黒い着物

靴は黒いブーツ

まああれです、イメージは空の境界で出てくる両義式が革ジャンの代わりに羽織を着て全身黒色な感じです

瞳はアメシストの宝石みたいな紫色です

特徴

・ 破幻の瞳

ぶつちやけ刀語ででてくる見稽古の強化版

・ ・ ・ チートです

・ 天性の武の才能

破幻の瞳をフルで使える身体能力、川神百代レベルです

・ ・ ・ ・ ・ チートです

・ 人見知り

誰も信じてません、自分も

・ 戦いを行うのを嫌います

人間嫌いなのでそもそも誰かと一緒に行動したくありません

・人の言うことを聞きません

自分が認めた相手以外、最低限の事しか聞きません
自分の気分で変わります

・社会不適合者です

社会に関心がありません

最初は今、生きていればいいと思っています

・家事スキル

学べば一発でできますが、面倒なのでしません

・自分を大切にしません

リストカットや自殺といった自分から体をいじめる行為はしないが
怪我をしても血を止めて終わりです

自分は居ても居なくてもいいと思ってますが、育て親の師禅が
注意していたので、今のところ死のうとは思っていません
しかし、生きたいとも思っていない

・学びたい

自分が知らない事、理解できない事を知りたいと思います
これも自分の気分しだいです

・武術家ではありません

師禅に鍛えられたが、武人とは、など

なぜ武術家とならねばならないのか理解できないし
進んで戦おうとしないので、武人と思っていません

チートがいっぱいですね

作者は小説という物を今まで書いたことがないので
オリ主のスキルがチートじゃないとなにもできません（笑）

温かい目で見守って下さい

後、タイトルの

真剣で幻が通る道

特に意味は無いです

主人公が幻のような人物だなあと
フツと思いながら付けました

更新日は決まっています

どのように物語が進むか作者もわかっていません

0章 設定（後書き）

はい、駄文ですね、
また説明を入れると思います。

1章 男と川神院（前書き）

はい、一話目です

駄文で、文才もからっきしですが

どうか温かい目で見守って下さると
ありがたいです

1章 男と川神院

・・・侍・・・

それはもう消えてしまったもの・・・

しかし侍が抱いた武士道は、力と美の象徴として今での日本人の心に深く刻みこまれている・・・

現在、日本では武家屋敷や武道家が数多く存在する・・・

しかし・・・遙か昔、侍がいた頃と比べると現代は大きく違う事があつた・・・

それは、女子が圧倒的に強いということ・・・

これは武家娘や武道家、色々な力を持つ者が多く通う、学校生活の物語

すると黒い着物を着た男は

「・・・川神鉄心・・・居る？」

すると門弟は目を細め・・・

「・・・失礼ですがご用件は？総代との試合を望むならばまず総代の孫にあたる川神百代殿との手合わせが決まりとなっておりですが・・・」

すると着物の男は静かに首を横に振ると布袋から一枚の手紙を取り出し

「・・・居るなら・・・これ渡して・・・」

と門弟に手紙を渡した。手紙を受け取った門弟は

「・・・少々ここでお待ちを」

そう言つて門弟は男を残して素早く室内に入つて行つた

少しの間、男は川神院の建物を眺めていると、

「・・・ああ、この雰囲気、俺には合わないそうだ・・・ん？」

ぼんやりと建物を眺めていると後ろから人の視線を感じ静かに振り返ると、

黒髪のロングヘアの女が一人、門のところで男を見ていた。

「お？着物を着ているから女だと思つたら、男じゃないか。しかしなんだその格好？葬式の返りか？誰だお前？挑戦者か？」

男は無言で女を上から下にゆっくりと眺めると、興味を無くしたかのようにまた、前を向いてしまった

「むっ、おい無視するなー、てゆうかこっち向けー」

女はそう言つて男の肩に手を置こうとして・・・空をきる

「・・・触るな、お前に用はない、消えろ」

女の隣で男は女を見ずに答える

女は少しの間、茫然とした後、顔をにやけて男をみる

「つれないことをいうなよーお前なかなか強いだろ？勝負しろ！最近挑戦者が来なくて退屈だったんだ」

女は新しい玩具を見つけた子どものように笑いながら男に話しかける
「・・・消えろ」

男は女に冷たく言い放った

「私は川神百代、次期川神院総代だ、お前名前はなんていうんだ？」
「・・・・・・・・」

「お前はなにか武道をするのか？身のこなしが素人じゃないぞ」

「・・・・・・・・」

「お前の流派は？武器は？どの位強い？」

「・・・・・・・・」

「なーなー無視するなよーこんな美人なお姉さんがはなしかけてるんだぞー相手しろー」

「・・・・・・・・あ・・・ウルサイ奴だ、消えろと言っている」

男はため息を吐きながら女を見ずに答える

「やっとな返事をしたと思っただらそれかー冷たい男は他の女に嫌われるぞー」

百代はふてくされているような顔をつくり、男に話かける

「・・・じゃあ嫌いになっただろ？・・・消えろ」

男は百代の方を向くが顔は川神院の方を見たまま答える

「他の女は、と言っただ、私は違うぞー、むしろお前に興味がある。勝負しろー」

「・・・俺は興味がない、だから失せろ」

男の返事に百代は、

「そんな冷たい事を言う奴にオシオキが必要だ・・・なっ！」

百代は男の顔面に向かっていきなりパンチを放った。だが男は、
「・・・・・・・・ひよい」

男はその場から一步も動かず、首だけを動かし飛んできたボールをよけるように百代のパンチをよける

「あはっ、これを簡単によけるか、何者だ？お前？最近の挑戦者はこれで大抵終わるのだからなあ」

「・・・・・・・・なんの真似だ？」

男は一段と機嫌が悪くなり、目を細めて百代を見る

「やっとな私を見たな、そしてこの実力、期待通りだ、ますます興味

がでてきたぞ」

百代は男の強さにますます期待し、笑顔で男にはなしかける

「・・・いきなり殴りかかってくるような奴が次期総代だと？本当にここがあの話で聞いた川神鉄心が居る川神院か？」

男がぼそつと呟くと、百代は首を傾げ、

「なんだお前、ジジイにようがあるのか？・・・まあそんなことより私と勝負だ！」

百代の反応に男は呆れながらはなしかける

「人の用事をそんなことって・・・はあ、勝負勝負って餓鬼を相手にしてる気分になってきた」

男の返事に百代は頬を膨らませ、

「餓鬼ってなんだ餓鬼って、こんな美人なお姉さんを捕まえて」

「捕まえてない、むしろこっちが捕まっているんだ」

「いいから勝負しろーこんな美人の相手をするのになにが不満なんだよー」

「・・・全部、第一こっちにメリットがない・・・」

男の答えに百代は首をガクツと落としたが、なにかを思いついたかのようにまた顔をにやけて、

「全部って・・・ん？ということはお前にメリットがあるなら私と勝負するんだな？」

男は後で後悔をする、百代の強さにはない、

どうしてももう少し百代というものに考えを働かせなかったのかを・・・。

1章 男と川神院（後書き）

はい、ありきたりですね
オリ主の性格が今後の作品で
変わっていくかもしれません
そこはご了承ください
ではまた会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019z/>

真剣で幻が通る道

2011年11月30日11時53分発行